



どこにでもいる当たり前の家族の姿だった。

人影のまばらなアウトレットモールを散策し、隣接するヨットハーバーから吹く潮風の中を仲良く三人で進む。
大柄な父親はよく喋りよく笑った。

娘も、娘に寄り添う母親もその様子に釣られて笑顔をこぼした。

普通と違うのは、車椅子に座った娘が一言も言葉を発していない事だった。

◇

板張りの栈橋で、買って来たパンをちぎっては群飛ぶカモメに放って飽きることのない娘の姿を、少し離れた所から両親が見守っていた。

「あのコったら、あんなに愉しそうに… 病院を出る時は死刑台に引きずり出されるみたいな顔をしてたから心配だったけど、とても良くなってそう。まるで今にも歩きだしそうじゃないですか」

眩しそうに手をかざしながら、紗季子が傍らの夫に話し掛けた。
だが恒彦は先程までどうって変わり厳しい顔で押し黙っていた。

「アナタ？」

「昨日、あの子の担当医と話した。リハビリトレーナーも交えてジックリとな」

「それで、先生は何ておっしゃってたの」

「背中の傷はこの一年でほぼ回復したそうだ。元々、重要な部分には殆んど傷は無かったし、神経を圧迫していた骨片も三回の手術でほぼ除去する事に成功した。にも関わらず加夏子の足は一向に動く兆しすら無い。言葉も戻ってこない。それに」

「あの事はまだ、なのね」

「ああ、何も思い出さないそうだ。あの日の記憶は、一年経った今も何一つ戻ってきていない」

太い溜め息が恒彦の口から漏れた。

「交通事故、か。そう信じ込む事で加夏子は恐怖を封じ込めたのだらうと医者には言っていた。だがその力が強過ぎて、自分が歩けたことも、喋れたことも、一緒に忘れてしまったんじゃないかとも言ってたよ」

胸のポケットからマルボロの箱を取り出しながら、どこかスがるような目で恒彦が紗季子を見た。

「なあ」

「？」

「もしかしたら、あの子は今のままのほうが幸せなんじゃないだろうか」

「そんな！ アナタったら」

紗季子は絶句した。

「歩く事や口をきく事を思い出すのが、加夏子の忘れてしまいたい恐怖を呼びさます事になるというなら、いっそのまの方が…」

タバコの火はつかなかった。

太い指の間でライターが震えていた。

◇

久しぶりの一家団欒の食事。

忘れかけていた父と母の暖かさ。

手作りのカルボナーラはひどく懐かしい味がした。

パパもママも、本当にワタシの帰りを待っていてくれたんだ

加夏子の想いは複雑であった。

今日まで病院で過ごしてきた一年間がすごく遠回りだったような、実体の無い脅迫観念に縛りつけられ続けてきたような、そんな気分であったのだ。

事故の怪我だってもうだいぶ良くなったって先生も言っていたし

そろそろ家に帰ることを考えなきゃダメかもな

ワタシ、何であんなに病院から出るのを怖がってたのかしら

こうして自分の家に戻り、父や母の変わらぬ笑顔に触れていると、加夏子は今までの自分が不思議に思えてきた。

ワタシ何も変わっていない

歩けないのと喋れないのを除けば

そんなの、べつに大したことじゃないや

加夏子の中で、その二つはさして重大な事では無かった。

普通ならそれだけで生きる希望を根こそぎ奪われてしまっても不思議ではない。

実はそこに異常な心の働きが加わっているという自覚が、彼女の中からはスッポリと抜け落ちていた。

◇

病院食と違いボリューム豊かな夕食にお腹が少し苦しくなった加夏子は、腹ごなしにリビング脇のスロープから庭へ出てみた。

潮の匂いがする夜風に髪がなびくに任せていると、庭に面した路上に人影が動いた。

全身の毛が逆さに立ち上がった。

「(…だれ…)」

「もしかして… カナちゃん、なのか？」

「(…憲一、くん?)」

加夏子は目を見開いた。

長身。ソフトな声。濃い色のジャケットを羽織った、ガッシリとしたシルエット。

海外留学へ出たきりずっと会っていなかった隣家の幼馴染みが、二年前より大人になった姿でそこに立っていた。

ケンちゃん…

ケンちゃんだ！！

夢中で車椅子のホイールを回し庭の端まで来ると、柵越しに身を乗り出してひしと抱きついた。

会いたかった

あいたかったよ

おかえりケンちゃん

声を出さずただただ涙を流して抱きついている加夏子の背を、彼…速水憲一は優しく撫でた。

「帰国したばかりなんだ。ゴメンよ、ずっと連絡しないで」

加夏子が激しく首を振った。

「事情があって帰ってこれなかったんだ。親の勝手なんだけどね。もしかしてと思って外へ出てみたらカナちゃんがいた。よかったよ、ホントに… ゴメン」

頭を下げる憲一に加夏子はもう一度首を振った。

とにかく再会できたこと、それが嬉しかったのだ。

だが。

「大変だったね。相手は通り魔だったんだろ？ ひどいことしやがって」

えっ？

◇

父さんがロンドンまで国際電話をかけてきたんだ
カナちゃんが大変だと

予備校の帰りに通り魔に襲われて切られたって
重傷で命の危険もあるって

飛んで帰りたかった
でも飛行機の席がなかなか取れなくて

そのうちにまた連絡があって
命は助かったけど足が動かないと伝えてきた
御見舞いには必ず行くからお前はしっかり勉強を続けろ
そんな事言ってきた

何度もなんども帰ってこようとしたんだ
その度に止められて、拳げ句『今帰国したら学費は出さないぞっ!』で
まったく何考えてんだか
やっと帰国したら今度は病院の名前も教えてくれないんだ
おかしいよ

でもやっと会えた…
ヨカッタ

憲一の話聞く加夏子の思考は凍り付いていた。

なに、それ
ワタシ事故で入院してたんだよ
パパやママだって怪我しちゃって、救急車だって来て、おまわりサンがたくさんいて…いて…運ばれて…ストレッチャー…

警官…

会話…

無線の…

……………

◇

「被害者は女性、え一、学生証から確認、〇〇高校の生徒、え一、氏名は清水 加夏子サン、17歳。鋭利な刀状の凶

器と思われます、背後から斜めにキズあり、えー、只今から搬送します。重傷です。…はい、はい、事情聴取は出来ません、は？ 無理です、今すぐ運ばないと危ないと隊員が… だから！ 無理だと言ってるだろう！！ 犯人？ そんなモノとっくに逃げてるよ！ 応援の要請はどうなってるんだ！？」

喫茶店の前の暗い路地。

首を回すと警官が一人、無線に向かって叫んでいた。

手も足も動かない。横にされ縛られ宙に浮いている、へんな感覚。

「搬送先は〇〇病院です、警察も同行しますか？」

救急隊員が息せき切って警官に聞いた。

「アア、俺が行こう。他の者は現場保存と事情聴取だ」

「では早く乗って！」

◇

見知らぬ映像が脳裏を流れてゆく。

その時…

バシッと何かの弾ける音がすると、失なわれた記憶の奔流が凄まじい勢いで溢れ出してきた。

駄目、そこを開けちゃだめ

思い出しちゃダメなんだって

それ以上喋らないで、ワタシに見せないで、アレを…あれだけは駄目っ！！

背中に激痛が走った。

傾き倒れてゆく世界の隅を、黒づくめの男が走り抜ける。

切長の冷たい目がこっちを一瞥してニヤリと笑った。

絶叫とともに憲一を突き飛ばした加夏子は、車椅子からころげ落ちて失神した。

悪夢が蘇った。